

兵庫が育む ころ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

1 月号
2019 No.815

特集

震災の経験と教訓を継承し、
「共生」の心を育む防災教育



県下初！遠隔授業システムで交流授業

～県立千種高等学校～



月刊「兵庫教育」
URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集 震災の経験と教訓を継承し、「共生」の心を育む防災教育

学校訪問

～地域になくてはならない学校として～
小さな学校で大きな夢を！

県立千種高等学校

巻頭言

こころ豊かで自立する人づくりのために

兵庫県教育長

にしうえ
西上 三鶴

1

論文

「共生」を育む防災教育のすすめ

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 教授

まえばやし
前林 清和

4

教育実践

地域に根差した防災教育

～ 9.13 わすれたらあかんDay山津波集会などの取組を通して～

宍粟市立一宮北小学校 教諭

いぐち
井口 伸吾

8

地域と連動した防災教育を目指して

神戸市立筒井台中学校長

ふくい
福井 啓太

12

地域に広げる防災・減災活動

～高校生が考える・つくる・動かす～

県立山崎高等学校 教諭

たたら
多々良 恵

16

クラスづくり

子どもから先生までの心の距離

兵庫教育大学大学院 教授

あきみつ
秋光 恵子

24

授業実践

丹波市を担う人材を育成することを目標とした
学校設定教科『丹波学（地域未来・起業経営）』

県立氷上高等学校 教諭

まつもと
松本 崇

26

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第68回）

高等学校における通級による指導の実践

～通級による指導の時間「社会スキル」を通した自立活動の取組～

県立氷上西高等学校 教諭

うすい
臼井 かずひこ

30

1 月 号 丹波市立春日中学校
イラスト 教諭 村井隆宏



授業実践研修レポート

小学校 国語科 「アップとルーズで伝える」

授業者：上郡町立山野里小学校 教諭 ^{たかまつ} 高松みのり

県立教育研修所 義務教育研修課 31

中堅教員等による随想

ふるさとを想うとき

養父市立養父中学校 主幹教諭 ^{にしがき} 西垣 ^{まさてる} 将輝 34

各分野で活躍する ひょうごの教員

EARTH（震災・学校支援チーム）活動報告
～ 18 年間のEARTH 災害派遣を振り返って～

県立芦屋高等学校 主幹教諭 ^{あさほり} 浅堀 ^{ひろし} 裕 35

県の施設紹介

ボランティア・市民活動のプラットフォーム あなたの一步を応援します！

ひょうごボランタリープラザ 38

コラム「学校の窓」

ドレスデンの夢

神戸大学大学院 教授 ^{わたなべ} 渡邊 ^{たかのぶ} 隆信 40

編集後記

トピックス P20～23

(但馬) 香美町立小代小学校
地域連携を生かして 22

(播磨東) 加古川市立浜の宮小学校
「あいさつ名人」溢れる学校へ 21

(播磨西) 相生市立平芝幼稚園
地元を愛し、愛される子に 22

(県立) 県立神崎工業高等学校
アンガーマネジメント入門 20

(丹波) 丹波市立氷上中学校
レッツ校歌ダンス！ 23

(神戸) 神戸市立神戸幼稚園
自分の命は自分で守る！ 20

(阪神) 三田市立けやき台小学校
ステップアップ・英語指導 21

(淡路) 淡路市立一宮中学校
人を大切にする心を育てる 23

特 小学校
集
No.1

地域に根差した防災教育
～9.13 わすれたらあかん Day
山津波集会などの取組を通して～



宍粟市立一宮北小学校
教諭 井口 伸吾

1 はじめに

(1) 学校紹介

校区は、兵庫県の中西部、宍粟市北部に位置し、兼業農家が多い農山村であり、自然の景観に恵まれ、四季折々の風情を醸し出している。南北に広く、児童144名中79名がスクールバスを利用して通学している。校区内には、福知溪谷、家原遺跡公園、名水の源泉等があり、地元の方々はもちろん、県内外から訪れる人々の憩いの場ともなっている。人心は純粹精励で、相互扶助の意識も根付いている。地域の人々の学校に対する愛着は強く、教育活動や学校行事等に積極的に協力・支援をしていただいている。

本校は平成28年度に3つの小学校(繁盛小、三方小、下三方小)が統合した学校である。開校以降、仲間意識を高めながら新しい学校の文化・伝統を築いている。また、一宮北中学校の校舎が隣接しており、日常的に交流をし、学校行事等を合同開催するなど、小中連携・一貫教育の良さを取り入れながら学校運営を進めている。地域とともにある学校づくり、地域を誇りに思う児童の育成に向けて、地域との連携を密にし、地域の人材や資源を活かした教育活動に取り組んでいる。

(2) 地域の災害特性について

本校区では、大雨による水害で、これまでも多くの被害が発生している。近年では、平成21年の台風9号による水害で、住宅が全壊したり、半壊、床上浸水、床下浸水したりするなどの大きな被害が出た。水道が443戸で断水と

なり、電気は各所で停電するなど、ライフラインへの影響も多く発生した。平成30年7月の台風7号の影響による豪雨では、平成21年と同様の住宅被害のほか、土砂崩れにより校区住民1名の尊い命が奪われた。また、自宅が被害を受け、避難所で数日間生活した児童もいた。



▲ 平成30年7月豪雨で崩落した橋

さらに、校区には低学年用防災教育副読本「あすにいきる」にも掲載されている『抜山伝説』の災害が300年語り継がれている。実際に、昭和51年9月13日、抜山地区で大規模な山津波が発生し、3名の尊い命が奪われてしまった。

このように、本校区には、大雨などによる水害や土砂災害により、人的、物的な被害が多く発生してきた歴史がある。

2 本校の防災教育について

(1) 防災教育年間指導計画について

本校の防災教育については、防災教育計画をもとにし、児童の発達段階や校区の災害特

性を踏まえて、指導内容を検討している。避難訓練や防災集会をはじめ、各教科、特別活動、総合的な学習の時間など、教育活動全体を通して防災教育を進め、児童一人一人が災害に適切に対応する能力を身に付けられるよう、防災教育年間指導計画を作成し、取り組んでいる。特に、各教科では、生活科での学校探検で学校の非常階段の使い方を説明したり、町探検の中で、避難所や災害時に危険な場所を確認する学習にも取り組んだり、総合的な学習で地域に起こった災害について調べたことを発表するなど、各教科の年間指導計画から防災教育に関わる指導内容を選び、発達段階に合わせて実施するようにしている。

(2) 小中合同避難訓練について

本校は、1学期には火災、3学期には地震の避難訓練に取り組んでいる。避難訓練の際には、災害発生時を想定し、隣接する一宮北中学校の生徒と一緒に避難訓練を行っている。ケースごとに、「何かあればあそこに避難する」という共通認識を持てるよう、一次避難場所を小学校中学校とも同じ場所に設定している。また、児童の避難訓練と同時に職員の役割や対応の流れも確認している。児童の引率や残留児童の確認、怪我をした児童の保護など、職員も実際の災害に対応できるよう訓練を行っている。

また、訓練毎に職員に児童の様子や職員の動きについてのアンケートを取り、改善点や次回の避難訓練の設定などを全員で出し合いながら進めている。



▲ 小中合同避難訓練の様子

(3) 9.13 わすれたらあかん Day 山津波集会について

地域の災害特性でも触れたが、本校区には抜山伝説と呼ばれる災害が語り継がれている。それは、「今から300年ほど前、大雨が降り続いた後、大規模な山津波が発生し、多くの被害が発生した。その光景を見た当時の人々は『山が抜けた』ということで、その地域を『抜山』と呼ぶようになった」というものだ。また、この言い伝えの他にも「抜山地区の山の頂上にざっくりとえぐられたような不自然な跡がある」「戦前抜山地区で井戸を掘った際、地下6mほどのところから化石のような稲株と籾がでてきた」「抜山地区にあるお地蔵さんは、300年前の山津波で被害にあわれた3人の方の霊を祭るためのお地蔵さんだ」という話など、大規模な災害だったことを物語る多くの言い伝えが語り継がれてきていた。そして言い伝えと同じような山津波が発生してしまった。

昭和51年、台風の接近とともに、9月8日から降り出した雨は6日間で637mmに達した。その雨が、やっとおさまった9月13日の早朝、山津波が発生した。はじめは小規模な土砂崩れが抜山地区で発生し、一家6人が生き埋めとなり、近所の人たちや消防団員らが懸命の救出活動を行い、3人を助け出した。そのあとも、小さな山崩れが続く中、残る3人の救出作業が続行された。

近隣住民や消防隊員など、500名ほどの人々が現場や現場付近にかけつけて救出活動に当たると、同地区の山の中腹の杉などが倒れるなど、さらなる土砂崩れの兆候が観測された。そのため、すぐにハンドマイクや消防自動車のサイレンで緊急避難が繰り返し呼びかけられ、避難が始まった。

そして9時30分頃「ゴオ！！」という無気味な地鳴りと共に、大きな山が動き出し、立ち木がバタバタと倒れ、大津波のように土砂が流れ落ち、民家や公共施設が次々と崩土にのまれた。鉄筋コンクリート3階建ての下三方小学校も土砂に流され、小さな箱をねじ曲げたようにくじけと歪んだ。この山津波に

よる土砂の流出は、約百万立方メートル。小学校・幼稚園・診療所・駐在所・郵便局、さらに民家40戸が崩壊した。

抜山地区にいたものは無我夢中で走って逃げた。遠くから救助の様子を見守っている人たちは、山津波のあまりの激しさに「おそらく数十人が犠牲になっているだろう」と考えた。しかし、住民の安否を確認した結果、最初に犠牲になった3人以外全員の無事が確認され、災害史上例のない「奇跡の全員脱出」と言われた。



▲ 山津波で 60 m も押し流された校舎

全員が無事脱出できた要因は、「第一次災害で住民らの注意が喚起されていた」「消防団員の脱出誘導が適切だった」「台風のため小学校・幼稚園が休みになっていた」ことなどがあげられているが、全員が無事避難することができた裏には、もう一つ理由がある。それは、地域に伝わる「抜山伝説」を当時の住人の約40%が知っていたということだ。この抜山伝説が、忘れられることなく語り継がれていたことで、山の異変に気付いたり、素早く避難したりすることができ、全員が二次被害から逃れて無事避難することができたと言われている。

このような大規模な災害を受け、旧下三方小学校では、災害のあった9月13日を「山津波災害の日」として位置づけ、毎年この日には、「山津波集会」と称して地域の方々の証言を聞いたり、災害に対する心構えについて話し合ったりすることで、地域に起こった災害を語り継いできた。また10年ほど前からは、集



▲ 9.13 わすれたらあかん Day

会の名前を「9.13わすれたらあかんDay 山津波集会」と改め、「この日を忘れてはいけない」という思いを新たにし、実施してきた。

平成28年の学校統合後も、この取組は続いており、今年度も隣接する一宮北中学校の生徒と一緒に、山津波の原因や避難方法、当時の様子や被災者の体験談等の学習をしている。発生から42年がたち、放っておくといつか風化してしまうかもしれないこの「抜山伝説」を、自分たちの頭を通し、体を通し、さらに心を通して見つめ直すことで、大事なことが今一度見えてくるのではないかと考える。地域で起こった災害を後世に語り継ぐために、本校では「9.13わすれたらあかんDay 山津波集会」を今後も継続していく。



▲ 災害時に校舎にかけられていた時計

(4) 総合防災訓練について

本校は今年度、国土交通省や陸上自衛隊、消防署、警察署、医師会、自治会、地域の消防団など様々な機関の協力のもと実施される宍粟市総合防災訓練に参加した。訓練想定は、本校の災害特性でもある大雨による災害だった。児童はまず近隣を流れる公文川の水位が

増し、河川が氾濫する可能性があるという放送を受け、避難訓練を行った後、学年ごとに「明日に生きる」を活用した防災授業を行った。6年生では、『阪神・淡路大震災のときに多くの命を救った地いきの助け合い』で、当日参加しておられた地域の自治会のみなさんとともに助け合う「共助」、『さい害時に命を救う仕事』で、消防や警察、自衛隊などの方々の災害時の活動、市や国土交通省の方などの防災の取組などの「公助」についての学習を行った。どの児童も熱心に話を聞いたり、自分がテレビなどで見たことなどを話し合ったりしていた。

防災授業の後は、各機関による様々な体験への参加や訓練、展示の見学などを行った。防災体験では、煙、地震、消火、放水等の体験をさせていただいた。地震体験では、今までに経験したことのない強い揺れを体験し、地震の恐ろしさを改めて感じていた。見学では、普段目にするものではない特殊車両やドローンなど最新の防災機器を見学させていただいたり、消防や警察の方による救助の様子を見学させていただいたりすることができた。

映像や写真で見るのではなく、実際に体験したり、見学したりすることで、児童の心にも強く残った様子だった。当日の感想の中には、「地震や水害が起きたときには、すぐに自分の命を守るための行動をとれるようにしたい」「近所には一人で住むおじいさんがおられるので、避難のときに声をかけようと思った」など、自助、共助の大切さを強く感じた児童や、「今まであまり知らなかった公助についてとても勉強になりました」と書いていた児童もいた。特に、地域の消防団については、児童の多くは存在を認識しているものの、実際の活動の様子を見ることはほとんどない児童が多く、「自分たちの住む町のためにがんばっておられるんだなと思いました。ぼくも大きくなったら消防団で地域のためにがんばりたいと思いました」という児童もいた。総合防災訓練を通し、児童は防災についての知識だけでなく、防災意識が高まったように感じた。



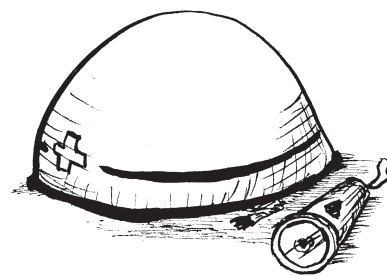
▲ 地震体験の様子

3 おわりに

防災教育年間指導計画を作成し、防災行事や各教科での防災授業に取り組んでいることで、6年間を見通した防災教育を実施することができている。児童は多様な体験や学習を通し、地域特性に応じた防災知識だけでなく、幅広い防災についての学習を深めることができている。また、地域に語り継がれてきた山津波災害についても、風化させてしまうことなく、山津波について学び続け、語り継いでいくことができている。

この学習は、児童にとって、実生活に密接に関連する事柄が多く、自分事として興味・関心をもって取り組むことができおり、児童だけでなく、防災授業や行事に取り組む教員の意識も高まってきている。

今後も防災学習や体験を通し、減災等についての学習を進めていくことで、災害時に自ら考え様々な状況に対応できる力を育成し、主体的に行動できる児童の育成を目指していく。そのためにも、年間指導計画を常に見直し、改善を行い、様々な機関や地域と連携を図りながら、防災教育をさらに充実させていきたい。



特 中学校
集
No.2

地域と連動した防災教育を
目指して



神戸市立筒井台中学校
校長 福井 啓太

1 はじめに

阪神・淡路大震災以後、神戸市は防災教育の先進地として、各校園において『生きる力』を育む防災教育を進めてきた。多様な自然災害が発生する中、地震や津波、土砂災害、河川の氾濫、台風などの様々な「自然災害への対応」について、地域の担い手としての中学生に、防災教育の必要性和個人人の危機意識の高揚が重要視されている。



▲ 写真1 本校校舎

2 筒井台中学校について

本校は、神戸市中央区の東端に位置する。校区は、南北に細長く、東は王子動物園、西は阪急電鉄神戸線春日野道駅、南は神戸市立科学技術高校、北は摩耶山へと続く登山道「青谷道」の入り口までのエリアである。二小一中で構成する学区で、学年3クラス規模の全校生徒272名の中学校である。

本校に進級してくる二つの小学校のうち、

上筒井小学校は、本校と同一の校舎で、神戸市でも唯一の小中一体型の校舎として生活を共にしている。と同時に、校舎は別に独立しているが全日制普通科高等学校の葺合高等学校も同一校地内にある。平成26年に一体型校舎の工事が完了し、平成27年度から校舎を共有した生活がスタートした。時程が異なるため、常時ノーチャイムで過ごしている。

一体校舎を生かして、相互に配慮した学校行事の設定や共有スペースの割振り方等、連絡を密にとりながら有効な連携ができるよう教育実践を行っている。また、本校に進級してくるもう一方の小学校との連携が希薄にならぬようその小学校の保護者心情に配慮しつつ、学校行事等との連携も十分に行いながら教育活動を展開している。

3 防災教育の推進

筒井台中学校区は、昭和13年の阪神大水害、平成7年の阪神・淡路大震災において甚大な被害を受け、多くの尊い命が奪われた。また、平成23年には東日本大震災が発生し、未曾有の津波被害そして原子力発電所の事故等によって、改めて災害に対する備えの重要性が注目される中、防災教育を実効性の高いものへと見直すことが必要となっている。

言い換えれば、平常時からの防災体制の整備、防災教育の推進を併行して実践することが、公教育を行う学校としての責務と考える。毎年行う防災マニュアルの見直しの視点を以下の①～④に基づいて設定し直している。

①地域特性に応じた避難場所・避難経路の設定と避難訓練の計画・実施

- ・想定される災害～阪神・淡路大震災クラスの直下型地震、南海トラフ巨大地震と津波被害、阪神大水害クラスの集中豪雨、局地的ゲリラ豪雨による土砂災害

②生徒の災害への対応能力を高めるための「防災教育カリキュラム」の策定

- ・各教科に位置づけられた防災教育の推進
- ・計画的、効果的な防災訓練の実施
- ・生徒会を中心とした主体的な活動の推進
- ・地域でのボランティア活動の推進と地域行事参加の促進
- ・神戸市教育委員会防災教育副教材「幸せ運ぼう」等の活用

③災害発生時の教職員の状況別役割分担の明確化

- ・避難所開設支援のための準備や避難所支援の役割分担
- ・早朝、夜間、休日等における発生時の職員集合・連絡手段等
- ・校外学習、部活動引率等、校外での生徒管理下の対応

④保護者への引き渡し方法の明確化と保護者への連絡周知徹底

- ・保護者との連絡方法の複線化
- ・様々な災害を想定し、発生時の状況に応じた最善の対応を図る

という視点で検討を加えている。この視点も加味し、マニュアルを策定するが、今年度の防災教育の年間スケジュールを表1のように策定し情報共有を行うこととなる。本校教職員のみならず、小学校教職員（校区の二小学校）、近隣の幼稚園・児童館の職員、地域自治会役員とも実施する。



▲ 小中連携避難訓練の様子

▼ 表1 2018 防災教育年間スケジュール

4月	年間スケジュール作成 小中防災教育担当者会議 2018防災マニュアル策定
5月	小中連携避難訓練実施 授業参観及び引き渡し訓練
7月	小中連携合同研修 「育てるカウンセリング」
8月	防災夏祭り「顔見知りになろう」 運営補助・模擬店・吹奏楽 「黄昏コンサート」
11月	近隣幼稚園・児童館との連携合同 避難訓練 籠池児童館・塩原幼稚園
12月	小中防災教育担当者会議 「活動の検証」成果と課題 防災餅つき大会
1月	合同避難訓練 「非常食を味わう・活用する」
2月	活動総括
3月	次年度活動方針提案

4 今年度の見直しの具体

今年度、次の二つの変更を行った。

①避難訓練の実施方法の変更について

2回実施する避難訓練の実施に当たって、実施日を秘匿した訓練を行った。管理職と教務部長、管理部長のみが実施日を知っており、それ以外の教職員と生徒には1週間の幅の実施予定期間の告知に留めるものであった。災害を予告せずとも、出現に対応する準備の一環として、また、災害発生時でも現実に対応可能な避難行動ができるよう企画したものである。

②避難マニュアルの追加（時系列、災害別の対応）について

表2のように、「直後」「1分以内に」「1時間以内に」「その日の内に」できることを

縦軸にとる。「地震」「天気の災害」「火災」「外出先」と異なる状況を横軸に取ったマトリックスを提示し、柔軟で、安心安全な避難行動を可能とする第一歩として、生徒に情報提供した。

防災教育に、避難行動から安全で安心な日常生活に到達するまでの繋ぎの行動の例示として、災害発生から1日分の行動やサバイバル行動の例示を生徒の手元に配布し、校内においても掲示をしている。これは、避難行動をとり、グラウンドに集合し、地域ごとに帰宅する事からの脱却を念頭に置いてもらうためである。また、中学生として、自身の安全と冷静さを取り戻した際、自分ができることを周囲の方々へ発信し、地域貢献できる存在として生徒自身にも、地域コミュニティにも認知してもらいたいと考えるからである。



▲ 防災教育の様子

5 避難所運営は「同窓会」の手で

神戸市に甚大な被害をもたらせた阪神・淡路大震災であったが、多くの教訓も得られた。

市内の多くの小中学校には、近くに住む方々が避難して来られた。つまり、その学校にゆかりのある方々が多かったのである。

健全な避難所運営に同窓会組織を活用できるのではないかと。さらに、平常時においても同窓会組織を活用した防災コミュニティを組織できるのではないかとという視点を持つことができるようになったのである。

具体の取組には、「顔見知りになろう」プロジェクトを立ち上げ、

①夏祭りでのボランティア

②近隣幼稚園・児童館との活動コラボ

の2点に絞って取り組むことにした。

(1) 夏祭りのボランティア活動

写真2は、上筒井青少年育成協議会が主催した夏祭りに参加した本校中学3年生の写真である。どのような形態の祭りにするか、模擬店運営の手法検討等運営企画から会議に参加した。中学生が、地域貢献できる存在であることを認知していただくための活動の端緒

▼表2 緊急時の避難対応行動アラカルト

できること	地震発生	天気の災害	火事発生	外出先の災害
直後の 10 秒	○机の下へ ○治まるまで待つ ○津波警報が出たらひたすら逃げる	○雷鳴が聞こえたら屋内へ ○黒く分厚い雲をチェック ○ビル街では避雷針へ ○金属は外す	○初期消火で勝負 ○息を止めて火から逃げる	○線路に落ちたら、ホーム下の窪みへ ○ホームには非常停止ボタンがある ○「110」「119」へTel ○川の水かさやゴミが増えたらすぐ堤防へ ○海で水が急に引いたらすぐ高い処へ逃げる
そのあと 1 分間	○靴を履いて屋外へ ○地域の避難場所へ ○呼吸スペースの確保 ○想定外を「想定する」	○屋内へ避難後、壁から離れる ○雷の被害は、救急要請 ○大雨は高い処へ	○近所へ火事通知通報依頼 ○外の火は水ではなく土を	○停電中、自動ドアは手で開ける ○電車内では、車内放送に注目、冷静に避難 ○駅・地下街の停電は、蓄光プレート・誘導ブロックを頼る ○行く手を拒むものは、迷わず破壊して進む ○動けるあいだに逃げる勇気を
1 時間 後までに	○靴がない場合は、靴代わりの物を作って逃げる ○携帯よりインターネットで救助要請を ○家にいられないときは迷わず避難所へ。(戸締りはして)			
その 当日	○電車が止まる。帰宅不能時は学校へ戻る ○ガス臭の場所から逃げる ○ケガは消毒。腫れてきたら医者へ。 ○大きな傷は、ガムテープ ○自分の安否→「171」災害用伝言ダイヤル			

【子どものための防災 Book 72 時間を生き抜くための 101 の方法 夏緑 著 童心社】参考

となればと考えている。

この活動の延長上に、生徒や同窓生が避難所運営の中心として活動することを自覚して、多数の同窓生が参加するように、積極的な情報発信ができるよう、働きかけたいと考える。



▲ 写真2 「顔見知りになろう，夏祭り」で模擬店のお手伝いをする中学生

(2) 近隣幼稚園・児童館との活動

写真3は、近隣の児童館で、幼児とその保護者と交流しているところである。地域での合同避難訓練では、本校に避難してくることとなるので、避難者の不安軽減のために事前に交流している。



▲ 写真3 中学2年生と近隣の児童館での交流

6 成果と課題

(1) 成果

「地域貢献できる中学生」になるということとは、この地域のことを主体的に考えることが、出発点となる。“何は足りていて”“何が

不足しているか”，“自分たち，中学生にできることは何か”，学校からの投げかけ・呼びかけと自治会役員の呼びかけに、保護者が応じ、3年生を中心に12名の生徒が夏祭りの企画運営に参加することができた。

この活動により、自治会役員の方々と保護者との繋がりが、濃密な様相であることが推察できた。今後とも学校側のラインと自治会役員のラインとの複数を確保し、ボランティア活動者の人員確保について、徐々にその主体を自治会側に委ねていく展望が持てた。

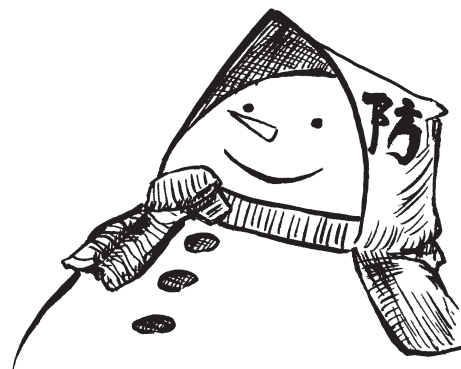
また、地域で登下校をする中学生の姿を見て、幼稚園や児童館と一緒に活動した幼児やその保護者から、以前よりも相互にあいさつをする機会が増えたり、交流の成果を感じさせる短い言葉の交換も、様々な場所や機会で行われていると報告を受けている。

この地域で、「同窓会が避難所運営」が可能となる兆しを感じている。

(2) 課題

「自助」「共助」「公助」の「共助」を充実させるために中学生ができること、それを中学生自身が主体的に考え、取り組む組織をイメージし、確固たるものにするために、「同窓会」を意識させたいと考えている。

部活動単位で、OB組織に基づく地域貢献人員の確保を考えてみたいという意見もあがっている。今後の課題としたい。



特 高等学校 No.3 集

地域に広げる防災・減災活動

～高校生が考える・つくる・動かす～



県立山崎高等学校

教諭 多々良 恵

1 はじめに＜背景＞

兵庫県立山崎高等学校は、播磨北西部に位置し、鳥取県と岡山県に県境を接する宍粟市に位置している。しそ森林王国と言われる自然環境に恵まれた地で、普通科、森林環境科学科、生活創造科の3学科からなる高等学校である。

宍粟市に隣接する佐用町では、平成21年8月の台風9号による集中豪雨で多くの尊い命が奪われ、家屋損壊は1,700戸以上に及び、被災した本校生徒・職員も多くいた。また、平成23年3月には、東日本大震災が起こったことで、被災地への支援活動をしなご私たちには「何ができるのか」「何をすべきか」を考え始めたのが活動のきっかけとなった。

また、本校は山崎断層の真上に位置しており、大きな地震がいつ発生してもおかしくない状況にある。日頃から防災意識を高め、地域を私たちの手で守る姿勢と力を身につける必要がある。そこで、平成24年度から生徒主体の防災体験活動をスタートした。以降毎年内容を充実させながら、活動を継続している。

2 取組内容

東日本大震災後、学校家庭クラブが中心となり被災地の園児に手作りの入学グッズなどを送る活動をしているが、さらに私たちにできる防災・減災活動はないだろうかと模索した。

(1) 平成 24 年度

「1.17ひょうご安全の日のつどい」に参加

し、校内でも非常食の実習や炊き出しの練習をし、生活創造科生徒がカレー 700食を作って全校生と地域の方に配布する第1回炊き出し訓練を実施した。

(2) 平成 25 年度

「生徒が企画する」防災炊き出し訓練を開始した。初年度は、避難訓練、炊き出し訓練（包装食の実演・実習他）、避難所設営訓練を地域の方にも参加してもらい実施した。

(3) 平成 26 年度

「1.17ひょうご安全の日のつどい」で教えていただいたポリ袋炊飯（写真1）を炊き出し訓練に取り入れ、避難所作り訓練のほか、生徒が指導役になっての応急処置体験、消火訓練（消火器・消火栓）、心肺蘇生法訓練を実施した。



▲ 写真1 ポリ袋炊飯

(4) 平成 27 年度

「食から防災を考える」というテーマで、防災食についての講演会・実習会を行った。

また、地元自治会の要望に応え、兵庫県立大学と連携して災害時要援護者リストの作成に取り組んだ。これは、生徒が地域の高齢者宅を一軒一軒訪問し、交流を重ねながら聞き取り調査をし、まとめたものである。

生徒が企画する体験活動は一層充実したものとなり、非常時の栄養補給に配慮した炊き出し訓練や、地域の高齢者を避難誘導する訓練（写真2）も行った。また、森林環境科学科がある特長を生かし、生徒が指導役として薪割り体験や担架作りなどを実施した。その後、地域の方を招待して防災活動についての報告会と地域交流会を開催した。



▲写真2 高齢者の避難誘導のための毛布を使った担架作り

(5) 平成 28 年度

地域防災には日頃の「つながり」が肝要との思いから、地域のふれあいサロンと連携した交流会（写真3）を開催し、その中で非常食α米の調理実演・試食会をした。また、地域防災マップ作成に向けての地域調査を行った。自治会内の危険箇所を歩いて調べ、高齢者宅を訪問調査した。防災士による地域防災マップ作成講座を開催し、地域の方と協力しながらマップの作成を行った。編集作業を経て完成した地域防災マップは、自治会内の全戸に配布した。生徒企画の防災体験活動では、避難誘導訓練（高齢者の避難誘導、段ボールを使ったベッド・椅子づくり、新聞スリッパ・応急マスク作成、防災マップ説明、防災クイズ他）、防災炊き出し訓練（ポリ袋炊飯、豚汁炊き出し、高速道路横断幕を再利用した担

架作り、非常食の試食、丸太ストーブ実演他）、防災体験訓練（煙体験、消火体験、負傷者搬送他）を実施した。また、子どもが避難時に背負えるリュックを手作りし、必要な物品を詰めて地域の商業施設で開催した学校のイベントでの販売も行った。



▲写真3 地元自治会との交流会での発表

(6) 平成 29 年度

自衛隊による防災についての講習会を実施し、避難所運営のあり方や被災時の高校生の役割などについて、レクチャーを受けた。生徒企画の防災体験活動では、本校同窓会館を避難所に見立て、クラスを自治会と見なして地域の方と共同で避難所運営体験を行った。防災炊き出し訓練では、空き缶と牛乳パック燃料でご飯を炊くサバイバル飯炊き（写真4）、乾物やかんばん等の保存食を使った料理など、非常食に関する体験学習を実施した。



▲写真4 サバイバル飯炊き

また、消防署の協力を得て、煙体験・搬送法・応急処置訓練（写真5）・ロープ結束などの体験学習も行った。そして、防災学習をまとめた「防災ガイドブック」を作成し、自治会全戸に配布した。地域のふれあいサロンと連携した交流会も催し、その中で地域の防災意識の向上を目指して防災についての発表や非常食の実演試食会を行った。



▲ 写真5 三角巾で応急処置

▼平成 29 年度の日程

4月15日	生徒防災リーダー決定
5月12日	防災体験活動の意義・目的について学習
5月26日	自衛隊からの講話「防災体験活動の意義・避難所生活の実際」
9月8日	防災体験活動に向けての企画開始
9月12日	宍粟消防署で体験活動内容についての相談・打ち合わせ1（リーダー生徒）
9月15日 ～10月3日	防災体験活動各学年プログラムについての企画・実施要項作成
10月6日	防災体験の企画についてプレゼンテーション（自治会・PTA・教員向け）
10月25日	宍粟消防署で体験活動内容についての打ち合わせ2（リーダー生徒）
11月17日	消防署で搬送法、救急法等の研修
11月	防災体験活動に向けての準備
12月15日	山崎高校防災体験活動実施
12月～2月	災害時の食事についての研究
1月7日	平成 29 年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」ぼうさい大賞表彰式・発表会
1月～2月	防災ガイドブック作成
2月4日	加生自治会ふれあいサロン（交流会・防災ワークショップ）の実施
3月3日	山高街の駅にて防災ガイドブック配布
3月15日	加生自治会へ防災ガイドブック配布

(7) 平成 30 年度

「食」にテーマを絞って防災・減災を学習している。地域の商業施設での学校のイベントで防災ワークショップを実施した。市販されている様々な非常食を展示するとともに試食会を開催し、防災意識のアンケート調査も行った。また、市内の食品メーカーが製造している防災麺の改良プロジェクトに参加し、高校生の視点から意見を出した。9月以降、非常食についての研究をしながら、12月に行う防災体験活動に向けて企画・準備を進めるとともに、全校での取組に進化させ、森林環境科学科1年生の生徒による木造仮設住宅建設訓練を加えて、総合防災訓練に発展させた。

3 成果

生徒手作りの防災体験活動を継続することで、年々生徒の意識は向上しており、活動の中身も充実してきている。そして、地元自治会との「つながり」も自然な形で強化できている。

また、生徒が地域の方と共に、災害時要援護者リストや防災マップ作成を行ったことで、地域住民の防災意識が向上し、今年度の自治会館の耐震工事のきっかけとなった。

防災・減災について体験活動を通して学び得たことを、防災ワークショップ（写真6）という形で、地域の商業施設等を利用して発信することで、生徒自身が災害を自分のこととして考えられるようになり、地域住民の意識も高めることができていると実感している。



▲ 写真6 防災ワークショップ

4 終わりに

本校の取組のポイントは、次の5点である。

(1) 地域との連携

平成24年度のスタート時から自治会と連携し、高校生として地域にいかに関与するか、という視点で活動を行っている。

(2) 多様性

市の消防防災課、消防署、防災センター、社会福祉協議会にも協力いただき、大学や地域の商業施設、食品メーカーとも連携して活動している。

(3) 独自性

専門学科の特色を活かし、栄養摂取に配慮した炊き出しメニューの考案、調理、全校生や地域の方への非常食実習の指導を生徒が行っている。

(4) 生徒の主体性

生活創造科2年生が中心となり、全体を掌握する統括リーダー、各学年の体験活動を取り仕切る学年リーダー、学年担当スタッフ(2年生)、補助スタッフ(1年生)という生徒組織により、各自が高い意識と責任をもって主体的に活動を作り上げている。

やまちゃん・さきちゃんの 防災ガイドブック



兵庫県立山崎高等学校 生活創造科

▲ 平成 29 年度作成の防災ガイドブック

(5)「活動の継続性」

学校設定科目「地域の生活文化」として取り組むため、継続した活動ができています。

いつ、どこで発生するかわからない自然災害に対して、生徒自身が企画・運営し、反省を踏まえて進化させていく過程で、「経験」するというのが、いつか、どこかで役に立つのではないかと考えつつ、今後も防災教育を継続・発展させていきたい。

<受賞歴>

- 平成28年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 優秀賞 (平成29年 1月)
- 平成29年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 ぼうさい大賞 (平成30年 1月) (写真7)
- 平成30年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 ぼうさい大賞 (平成31年 1月)



▲ 写真7 平成 29 年度 ぼうさい大賞表彰式

